千刈狸の呟き

～ ジャイアンはいつ弱くなったのか ～

仔　　狸

仔狸が小さいころから国民的人気アニメーションの代表としてドラえもんがあった。勉強もスポーツも苦手な小学生・野比のび太が、未来から来たネコ型ロボット・ドラえもんと繰り広げる日常生活を題材にした物語である。登場人物で特徴的なのが剛田武（通称ジャイアン）だろうか。体が大きくて、声が大きくて、乱暴で…いわゆるガキ大将である。のび太に命令したり、歌謡ショーを開いて自分の歌を聴かせるのはパワーハラスメントと言っても良いのかもしれない。当時のいろいろなアニメーションの登場人物にひとりはこのようなキャラクターが設定されている。実生活でも仔狸が小さいころは体と声の大きな男子は怖かった。学校では並ぶと前から２番目が定位置の仔狸にとっては、クラスのほとんどの狸は自分より大きく、声までかけられようものなら逆らうことはできなかった。小さいころに刷り込まれた記憶は大きくなっても引き継ぐもので、自信満々に大きな声で物申す狸の言葉はなんでも正しいことに聞こえてしまう。昔の政治の世界に生きる狸や大学を率いる狸は、リーダー狸として声も大きいし、癖が強く、目立った。仔狸のような普通の狸たちは、リーダー狸の言うことには何の疑問を挟むこともなく懸命に後をついていった。大体のところ、ついていけば間違いないという感じだろうか。もちろんリーダー狸に賛同できない、あるいは何かしらの被害を被った狸もいるだろうが、一昔前ならば相手以上の体と声の大きさを持たないと、発した声は誰にも聞こえなかっただろう。

ところが、仔狸の子供世代の若い狸は自分の考えを堂々と述べる教育を受けているようだ。若いアスリートでも俳優でもアイドルでも、自分が同じ年のころには絶対言えなかったような言葉を並べ、とても落ち着いて自分の意見を述べることができる。参観日に挙手したら指名されて、「立ったら忘れました」と言った仔狸とは雲泥の差である。結果仔狸は若い狸たちの堂々とした物言いに翻弄されることとなる。いろいろなことを経験したい若い狸はSNSで情報を得、実践するチャンスを待っている。動画で疑似体験をしているのか、見たことがある＝経験した＝できる…という強い気持ちを持った若い狸たちが、仔狸の周りで手ぐすねを引いて待っている。『できると思う』と『任せられる』の間の広い隙間を指導者として見守らなければならない。指導するとしても、個を否定する言葉や『自分たちの時は』…もNGワードである。

若い狸たちが堂々とした物言いができる裏付けとして、インターネットによる情報収集などのツールが発達したことがある。そして今は、体も声も大きくはない内向的な狸でも、SNSを使って自分の意見を世界中に発信することができるようになった。かつて自分が感じた不条理な思いにはパワーハラスメント・モラルハラスメントという言葉が割り付けられ、ハラスメントを行ったことが何らかの形で発信されれば社会的に罰せられることとなる。今の世の中ではジャイアンには力がなくなってしまったかもしれない。

ハラスメントの無い世界は、いくらかのハラスメントの中で育ってきた仔狸には少し住みにくい。若い狸たちはどこまでなら許してくれるのか、物言い一つ悩まないといけない。このような相手を思いやる優しい世界で育った若い狸たちが、外に出たときに遠慮なく浴びせられる言葉や仕打ちにどう立ち向かうのか…甚だ心配である。

コロナ禍で狸同士のかかわり方が変わり、SNSによる情報発信やAIによる情報収集など無機質な部分が主流となってきた。芸能事務所や伝統芸能、学生スポーツなどこれまでは絶対揺るがないだろうと考えられていたジャイアン的な狸たちは、これまで泣き寝入りしていたかもしれない小さな狸たちの情報戦であっという間に立場が逆転してしまう。

体罰のようなことが割と日常的にあって、部活の間は水を飲んではいけないと言われながら育った仔狸世代は、ジャイアンのように上から圧をかけられるのには慣れているかもしれないが、SNSで拡散してやると言われたらお手上げである。

発信すれば何とかなるかもしれない世界…が誰にとっても平等で過ごしやすい世界であることを願っています。